



えどまえ うみ まな わ
江戸前の海 学びの環づくり
瓦版 第10号



東京海洋大学 江戸前ESD協議会 〒108-8477 東京都港区港南4-5-7 東京海洋大学海洋科学部

海洋ESD実習

「高浜運河でハゼを釣る」



工藤 貴史（東京海洋大学・海洋政策文化学科・准教授）

1. 本年度の海洋ESD実習

東京海洋大学大学院海洋管理政策学専攻では、実践的教育をカリキュラムの柱の1つにしており、その中心的な科目として「海洋ESD実習」を設けている。本年度は、「東京湾ボラサミットなぜ、東京湾の魚を食べないのか?」、「江戸前ESDサイエンス・カフェ@Library 2009」、「港区芝の漁師町を語ろう」、「高浜運河でハゼを釣る」の4つのプログラムを用意し、受講者はその中から1つを選択し、プログラム策定、参加者の指導や話し合いの進行を行いながら海洋管理に必要な知識やファシリテーション・スキルを学ぶこととなっている。

私は、「高浜運河でハゼを釣る」というプログラム(右表)を担当した。このプログラムは、今年初めて実施するものである。きっかけは、昨年8月に本学で開催された江戸前ESDサイエンス・カフェ@Library「江戸前の海と魚を知ろう」で私が東京湾の釣りについて報告した際に、来年度は「高浜運河の四季を釣る」というイベントをやりたいと言ったところ、参加者で近所のマンションにお住まいの方から、是非参加したいのでマンションの掲示板に開催通知を貼っておいてください、と言われたことに端を発している。

我々の研究室は、なぜか釣り好きの学生が多く集まってくることもあり、近年、東京海洋大学品川キャンパス沿いにある高浜運河で釣りをすることが増えている。初めは、春の新歓シーズンにスズキ釣りをやるく

(2 ページに続く)

海洋ESD実習「高浜運河でハゼを釣る」 プログラム

目的：マハゼ釣りを通して、身近な自然とのかかわりと、身近な人達とのかかわりを深める。

日時：8月22日(土) 13:00～17:00

参加者：5組12名（港区港南在住）

参加学生（運営）：10名

場所：東京海洋大学品川キャンパス／高浜運河

13:00～13:30 マハゼってどんな生き物？

高浜運河水槽展示

釣り方レクチャー

13:30～15:30 高浜運河でマハゼ釣り+テナガエビ釣り

15:30～

東京湾の埋立とマハゼ釣りの歴史
試食会（マハゼとテナガエビの
天ぷら）

ふりかえり

工藤 貴史（くどう・たかふみ） 1970年東京生まれ、多摩ニュータウン育ち。多摩ニュータウンは、人工的な計画都市なので「季節のない街」と思われがちですが、少しはずれに行くと豊かな自然が残っています。子供の頃はその自然のなかで、虫やカエルを採ったり、魚釣りをしたりして遊んでいました。自然相手の遊びは、思いどおりにはいかず、想定外のことが起こります。みなさん、想定外のことで最近起きましたか？来年は、「釣り」という遊びを活かして、もっと地域の方々とのつながりがもてればと思っています。



(1 ページから続く)

らいであったが、初夏にはテナガエビ釣り、盛夏にはハゼ釣り、晩秋にはボラ釣りと年間を通して高浜運河に繰り出すようになっていった。学生は釣りにいくたびにいろいろ発見をしてくる。「御楯橋の下にでっかいテナガエビがいる」「ボラの群れがいなくなった」「今日はグッピーがいた」など、学生同士や私との会話も、高浜運河の話題が多い。我々の研究室では、「高浜運河」が学生同士や学生と私を結ぶ潤滑油になっているといっても過言ではない。

そんなこともあり、大学周辺の身近な自然を活かして、近所にお住まいの方々とのつながりが持てないかという思いから、「高浜運河の四季を釣る」というイベントを考え、まずは今年度、「高浜運河でハゼを釣る」を実施してみることにした。

2. 「高浜運河でハゼを釣る」を準備する

このプログラムには6名の学生が参加することとなった。第一回目の打ち合わせを6月24日に行った。私がプログラムのおおまかなアウトラインを説明し、具体的な内容(座学の内容、釣り方をどう教えるか、試食会等)や広報活動については学生が主体的に考えるように伝えた。学生達は、私が思っていたより、積極的にいろいろと意見を出し合っていたことが印象的であった。次回の打ち合わせまでに宣伝用のピラを各自デザインしてくるようになった。

第二回目の打ち合わせは7月21日に行い、皆が作成してきたピラを見せあい、そのなかから図1のピラを選定した。選に洩れた他のピラも、魅力的なデザインが多く、今にして思えば、1枚に絞る必要はなかったと後悔している。さて、ピラは7月24日に、近隣のマンション、児童館、港南福祉館、スーパーマルエツに配布することになった。

まずは、学生ともども港南福祉館と児童館にピラを貼らせてもらえないか頼みに行ったところ、担当の方に快く了承していただいた。これに気を良くし、近隣のマンションに向かったが、最近のマンションはセキュリティが厳しく、まず玄関でインターフォンを押して管理人に用件を伝えてからでないと入館できないので(またピラを貼るような掲示版があるかどうかも分からないので)、私が尻込みしてしまった。目星をつけていたマンションをいくつか廻ったが、結局、どのマンションにもピラをはることでできず、最後のマン

品川の自然を体験してみよう!

品川駅に行く途中、橋を渡りますよね?

実は、あの橋の下の川にはお魚がいっぱいいます。

魚釣りを通して、品川の自然を満喫してみませんか?

日時：8月22日(土) 13:00~17:00(予定) 雨天決行
内容：ハゼ釣り体験(釣具無料貸し出しあり) ハゼ試食会など
場所：東京海洋大学品川キャンパスB号館 高浜運河
募集：先着20組様(参加費無料)

☆ 当日の流れ

13:00 東京海洋大学正門 集合
13:00~13:30 ハゼの釣り方レクチャー
13:30~15:30 高浜運河へ移動、ハゼ釣り
15:30頃~ 試食会(ハゼの食べ比べ)



☆ 問い合わせ先

工藤貴史 〒108-8477 東京都港区港南4-5-7 東京海洋大学
TEL & FAX 03-5463-0569

E-mail kudot@kaiyodai.ac.jp

参加をご希望される方は人数を明記して、上記の問い合わせ先にご連絡下さい
締め切りは8月15日(土)です

※注意※

当日は、大変暑くなる恐れがあります。十分な熱中症対策(帽子、水分補給など)をよろしくお願いします。

いっぱい釣れるといいなあ



(企画：海洋大品川ハゼ釣り普及推進委員会)

図1 「高浜運河でハゼを釣る」広報用のピラ

ション(冒頭で話したマンションイベントに参加したので知らせてほしいという方がお住まいのマンション)にまで来てしまった。そのマンションはこれまで以上に入りづらい印象であったが、さすがに学生のほうがしびれをきらし、「先生、駄目もとでいっちゃいましょうよ」といわれ、おそろおそろインターフォンを押すことになった。海洋大を名乗るとあっさり入館が許され、受付に通された。高級ホテルのフロントさながらの受付に私はさらに緊張したが、受付の方は高級ホテルのフロントマンにもひげを取らない笑顔で対応してくださり、20枚ほどのピラを受付の横に置かせてもらえることになった。最後にスーパーマルエツに行ったが、学生達は最早こいつ(私)には任せておけないと悟ったようで、自分達から店長に話をして、ピラを貼らせてもらえることになった。

ピラを貼ってから、すぐに参加したいとの連絡が入り、締め切りまでに5組12名(大人9名、子供3名)の方が参加することになった。予定では20名ぐらい参加者が集まるのではないかと考えていたが、私が尻込みしたばかりに、予定より少ない人数になってしまった。結果的にはちょうどいい人数であったのだが。

その後、8月20日に最終の打ち合わせを行い、座学の内容と担当を確認した。まず、釣りをする前に、「マハゼって何?」と題し、マハゼの生態や生活史についてクイズを交えながら紹介し、次いで「マハゼの釣り方」と注意点を話すこととした。釣りを終えてから

は、東京湾埋立の歴史を航空写真などにより紹介し、マハゼが生息するにはなくてはならない浅場が減少しているを示し、次いでそのような環境変化によって東京湾のマハゼ釣りがどのように変遷してきたのかを紹介することとなった。また、「高浜運河」の生き物を水槽に入れて展示することにした。

試食会では、味比べをすることにしていたので、前日夕刻に研究室のメンバー5名で豊海運河にマハゼ釣りに行った。ここは、東京湾の中でもマハゼ釣りが盛んな場所で、当日も平日にも関わらず多くの釣り人がマハゼ釣りを楽しんでいた。時間帯がよくなかったのか釣果のほうは芳しくなかったが、試食会で食べるくらいの量はなんとか確保することができた。この調子だと、明日はあまり釣れないかもしれないと不安がよぎる。

3. 高浜運河でマハゼを釣ってみる

当日は快晴、気温がかなり高いので、大人でも2時間釣りをするのは辛いのではないかとという状況であった。大学の正門前に13時に集合し、まずは8号館で座学(写真1)。はじめは、参加者も我々も緊張があったが、学生が場を和ませてくれたおかげで、徐々に笑顔が見られるようになった。水槽には、高浜運河でとれたマハゼ、チチブ、テナガエビ、グッピー(!)を入れて展示した。

座学を終えて、いよいよ釣り。釣り場では、すでに我々の研究室のメンバーが釣り道具の用意を済ませ準備万端で待ち構えていた。普段、研究室では見せないような笑顔で参加者に手際良く道具を渡していた。当初の不安をよそに、1投目からマハゼは釣れ、歓声があがる。昨日釣りをした都内有数のポイントよりも魚影は濃く、つぎつぎに釣れて一安心。参加者1組に学生を1人つけて、餌をつけてあげたり、魚を針から外してあげたりしたが、入れ食いの状況に大忙しであった。

30分もたつと、参加者全員が釣れて、各グループ10尾以上の釣果をえることになった。参加者からは「こんなに一杯釣れるとは思わなかった」、「他に食べられる魚は釣れないんですか」という声があった。子供たちは、釣りがひと段落すると、バケツに入った魚をじっと見たり手に触れたりしていた。

十分に釣れたので、暑さを避けるため日陰のある御楯橋の下に移動してテナガエビを釣ることにした。大



写真1 8号館203教室にてマハゼの釣り方を教えているところ。



写真2 「近所でこんなにマハゼが釣れるとは思わなかった」



写真3 みなよく釣れました。(高浜運河にて)

きなテナガエビが見える。一同、興奮し、早速竿を出すと、餌を大きな手で抱えるのだが、なかなか口には針がかからず、ハゼ釣りからは一転し真剣モードになった。大人のほうが夢中になっていた。そのうち、コツをつかんだようで、1尾、また1尾と釣れるようになった。参加者はいつも通っている橋の下にこんなに大きいテナガエビがいることに驚いていた。また、散歩で通りがかった近所の方々も、釣り集団に驚かれ、さらに大きなテナガエビを見て目を丸くしていた。テナガエビ釣りをしている時に、大きなボラの大群がやってきて、これにも皆さん驚き、参加者の少年が釣り上げようと竿をたらししていた。その真剣な表情がとても印象的であった。

予定よりも30分早く切り上げ、大学に戻ることにした。道中、みな充実した顔をしていたので、ようやくここでほっとすることができた。学生達も参加者と打ち解けたようで、会話も弾んでいた。大学に戻ってから、ハゼの試食会まで時間がかかるので、東京湾の埋立とハゼ釣りの歴史を学生達が報告した。皆さん疲れているにもかかわらず真剣に話を聞いていた。研究室のメンバーが手際良くハゼとテナガエビを天ぷらにしてくれた。とても美味しかったことはいうまでもない(これにビールであれば最高であったが)。

最後に、参加者から本日の感想を言っていた。「近所でこんなにハゼが釣れるとは思わなかった。ビックリです。」「近所でこんなに楽しめることを知ってよかった。また釣りに来ます。」「祖父が品川に住んでおり、私が小さいころに秋に釣ったハゼで焼きダシを作り、お正月のお雑煮のダシ



写真4 学生達が手際良く釣りの準備をしてくれました。



写真5「ほく、餌されるんだよ」

に使っていました。私も子供にやってあげようと思いました。」「来年も参加したい。」等の感想があった。我々にとっても、楽しい1日となった。

(くどう・たかふみ)



写真6 みなさんおつかれさまでした。

海洋ESD実習

「高浜運河でハゼを釣る」
に参加して

以下は、海洋ESD実習「高浜運河でハゼを釣る」に参加した学生4名（海洋管理政策学専攻・1年）の感想です。
（江戸前ESD瓦版編集委員会）

身近な自然を知ってもらうために

金子 大輔

今回の実習を通じて印象に残ったことは、一般の人は釣りをしてみたいと思ってもなかなかその一歩を踏み出すことが出来ないということです。

数名の参加者に普段、釣りをするか聞いたところ、聞いた参加者全てが釣りをしてみたいと思ってもこういう機会がないと出来ないと話していました。

私たちのような海や釣り、魚が好きな人間とは違い一般の人は興味があってもその一歩を踏み出す前に終わってしまう印象を受けました。

しかし、このような機会があれば興味を持ってもらえることも実感しました。ある参加者の方はこの実習が始まる前は水槽にある魚を見ることもなかったのですが、実習後には水槽の魚を見て、「今日釣った魚がどれかな？」と親子で話していました。やはり実際に釣りなどをして魚に触れることをしないと興味を持ってもらえないと実感しました。

今後について考えると、少しでも多くの方に釣りの楽しさや自然が身近にあることを体感してもらうために参加者を増やす工夫をする必要があると思います。

例えば、今回の参加者に来年の実習が行われる季節にメールや手紙などを送って参加を促したりして参加してもらったり、友人を連れてきてもらったりしたらどうでしょうか。

また、参加者にハゼ釣り以外の釣り(大学の近くで釣れる魚種)の釣り方の紙みたいなものを渡しても良いのではないのでしょうか。

そのようなやり方でこれからもこのESD実習が活用されたら1年に1回は釣りをするという行為を行うことになり、興味を沸かした方は趣味として釣りをしてくれるのではないのでしょうか。

(かねこ・だいすけ)



写真7 はいポーズ！



写真8 家族全員釣れました！

写真9 金子大輔
くん

釣りを通して生まれる交流

郭 穎

ESD実習が始まる前までに、私は釣りをやったことは全然なく、またマハゼという魚も聞いたことないです。そのため、8月22日の実習でどのような感じなのだろうか、簡単なインタビューはどうやってすればいいかと不安いっぱいでした。

実際、ESD実習が始まってみると、とても充実の一日でした。実習に参加してきた市民たちは、みんな親切で、連れてきた子供たちもすごくかわいいです。市民たちと簡単にしゃべってから、緊張の気持ちはすぐなくなりました。

ESD実習で、一番楽しかったのはハゼを釣ることです。市民たちがみんな打ち込んで、魚を釣れた時大喜びでした。みんなの笑顔を見ると、満足感が溢れてきました。私は初めて釣りをするので、一匹しか釣れませんでした。しかし、一匹と言っても、やはり嬉しかったです。釣れた時、写真も撮られまして、この写真は大事なものだから、これからも大切にしたいと思います。

このように2時間は慌しく過ぎました。市民たちが釣りの収穫を持ち、笑いながら教室に戻って、自分で釣れたマハゼを食べてから、感謝の気持ちで帰りました。

今回のESD実習で私は先生のもとで学んだことはたくさんありました。その一日にとっても楽しく過ごしました。これから、機会があればまた参加したいと思います。（かく・い）



写真10 郭穎さん

大学と地域の係わりを深める

佐藤 尚樹

今回、私は海洋ESD実習としてハゼ釣りのイベントに関する企画・運営に関わった。企画においてはまず当日の内容を考えた上で自分たちでポスター案を作成し、それぞれの案の良いところや必要事項について話しながら1種類の案を作り、これを実際にスーパーや大学周辺の住宅施設に掲示のお願いに行った。大学周辺のお店やマンションの方は意外とお願いを受け入れてくれて、こうしたイベントを通して大学の宣伝に加え、大学と地域の係わり合いがより強いものとなればよいなと感じた。

続いて、参加者が決まった段階で当日の細かいスケジュールや注意事項を割り振った上で当日を迎えた。当日の参加者の反応は非常によく、参加者全員が楽しんでくれていたように感じた。最後の感想の中でも「こんなに簡単に、しかも短時間で釣れることに驚いた」といった内容や「身近な環境を知ることが出来てよかった」という言葉が聞かれた。

ESDは環境教育を考えるあり方で、地域内にいる異なる立場の人々が地域の環境について考えることで、より良い地域・環境を作っていくというものである。それにはまず自分たちが住んでいる場所についての理解が必要である。今回の実習は大学との交流を通してこれまでとは異なる知識を得たり、さらに新しい人と人との繋がりが出来るなどの非常に良い機会を作ることが出来たと思う。

私は去年の半年ほど環境NPOの手伝いに行っており、また、近年は漁業者が環境教育を担っている

例もあり、これから水産業や漁村地域の勉強をしていく者として、環境教育のあり方と漁業の関わりについても経験や勉強をもっと重ねていきたいと感じた。（さとう・なおき）



写真11 佐藤尚樹くん

釣りを通しての交流を 深めるための5つの課題

西村 絵美

今回のESD実習(ハゼ釣り)では、学生である私たちと普段触れ合う機会があまりないと思われる4組9名(+留学生ら)の参加者とハゼ釣りを通して交流することができ、貴重な体験ができた。

企画はほぼ固まっていたが、広報・宣伝(チラシ作り、配布作業)などの事前準備を自分たちの手で行ったことで、1日だけのイベントとはいえ、計画を実施に移すには段階を踏まねばならず、簡単ではないことを勉強できた。参加者のお父さんたちの中には、小さい頃ハゼ釣りを楽しんだ経験を持つ人も見受けられ、これまでハゼを見たり触ったりしたことのない子供との間に新たに共通の体験、親子の絆といえるものが生まれたのではないかとと思われる。

また、座学では、1950年代には東京湾でハゼ釣りを楽しむ人がこんなにもいたのかと改めて驚かされた。参加者のお父さんからも、お爺さんの時代にはハゼがたくさんおり、よく釣ったハゼを干してお雑煮等の出汁として使用するのを見ていたという貴重な話を聞くことが出来た。相次ぐ埋め立てと船を通行させるための浅場の減少が、ハゼの生息域を奪い、同時に地域の食文化を含め、釣りを通したハゼと人との関わりを希薄にしてしまったことは、残念なことであると思う。ハゼ釣り愛好者の数が現在では1950年代の10分の1にまで減少してしまったことから見ても、希薄になった魚あるいは川・海と人との



写真12 西村恵美さん(左端)

の関わりがすぐに復活するとは思えないが、徐々にでも釣りという遊びを通して、両者の間に少しでもよい関係性が築ければいいと思う。このハゼ釣りイベントを継続した取り組みとすることで、イベントの趣旨(コンセプト)をより多くの一般の人々に理解してもらい、今後の展開を見守る必要があると考える。

今回のESD実習(ハゼ釣り)を通して気付いた点、改善が期待される点は、主に次の5点である。

1. 人数調整に関わる問題

今回は、たまたま参加者が4組と少なかったことから、工藤先生のゼミ生4名に、参加者それぞれについて釣り方の指導やエサ付け、針外し、岩などに釣り糸が絡まったときの処理等を手伝ってもらうことができ、釣りに詳しくない実習生もいる中で、釣り初心者に近い参加者でも十分満足してもらえる内容となったように思う。また食べ比べのための月島など他の場所での釣り、水槽展示、ハゼの調理など、全般にわたって工藤先生のゼミ生の協力がなければこのイベントを実施するのは困難であったと思われる。この企画を実習生だけで全て遂行し、かつ参加者に満足してもらい出来るするには、参加者の人数を5組以内に抑える(=先着5組までとチラシに書く)ことと、実習生の人数を2倍程度に増やすことが必要である。

2. 餌の問題

今回のハゼ釣りではゴカイを餌に用いたが、参加者の中には、ゴカイに触るのが嫌で釣りをあきらめたというお父さんもおり、今後継続的に実施していく上で、釣り餌にも工夫の余地があると思われる。もしハゼが練り餌も食べるようであれば、それも同時に準備し、ゴカイが苦手な参加者でも気軽に釣りを楽しめるような環境を整えておけばよいと思う。

3. 釣り時間の問題

釣りに夢中になっているとあっという間ではあるが、炎天下での2時間の釣りは、実際少し長く感じた。釣り時間は、参加者の希望を聞く必要があるが、特に参加者に小さい子供がいる場合は、メリハリをつけて工夫しないと飽きてしまうように感じられた。また、今回はたまたまどの組もよく釣れていたため、飽きさせる暇を与えなかったかもしれないが、

(8 ページに続く)

(7ページから続く)

あまり釣れない場合の対処の仕方も考えておく必要がある。狙う魚種と釣り場(ポイント)を変えることに加えて、前半戦と後半戦で分けて、前半戦が終わった時に一斉に休憩タイムを入れ、ジュースを飲んで一息ついてもらいながら釣獲尾数と魚体サイズの組ごとの中間発表をすると、さらに盛り上がるかもしれない。

4. 座学の場所の選択に関する問題

今回は203教室で座学を行ったが、少し広すぎて、参加者同士の距離が縮まりにくかったのではないかなと思われる。4組程度であれば、8号館305教室ぐらいのスペースでも十分に対応できるであろう。また、机も円卓(会議室のような)にして参加者全員で囲める形にすれば、試食をしながら会話もはずみ、参加者の親子同士でも交流が深まって、常連参加者の獲得にも繋がると考える。さらに、水槽を置く位置に関してであるが、周りを参加者が取り囲んだ机の真ん中に設置すれば、もっと関心を持って見てもらえたのではないかなと思う。

5. その他

写真に関して、今回のように後日郵送で渡す形にすると、住所を記入するのが好まない参加者もいることが予想される。そこで、釣りが終わるとすぐに、手の空いている実習生がコンビニにデータを持って行き、その場で現像して試食会が終わる頃までに各組に手渡せるように準備するのが良いと思われる。この場合、全員の記念写真は撮れないかもしれないが、釣ったときの感動は呼び起こされ、参加者にとってはこのハゼ釣りイベントが、思い出としてより記憶に残る夏のイベントになるのではないかなと考える。

(にしむら・えみ)



写真13 揚げたてのハゼのてんぷらに「おいしい！」

海洋ESD実習を終えて

工藤 貴史



学生達の感想にもあるように、初めてのイベントということでは足りない点も多々あったが、たくさんハゼが釣れたこともあり、概ね成功したといえるのではないかなと思う。後日、私のもとに参加した少年の絵日記が届いたり、また当日参加した方が海鷹祭に来られ「あれからまたハゼを釣りに行きました」と学生に声をかけてくださったりと、うれしいこともあった。

大学でこうしたイベントをやるという、アカデミックすぎたり、ややもするとお説教くさくなったりしてしまいがちであるが(勿論それも必要でしょうが)、先ずはきっかけとして「身近な自然を楽しむ」ということが、ESD活動の持続性やその目標へと向かわしめる原動力として大切なのではないかなということを感じた。来年度からは「高浜運河の四季を釣る」を始めてみたい。

(くどう・たかふみ)



写真14 釣りあげたハゼは学生が手際よくてんぷらに調理してくれました。



編集後記



工藤貴史さんの研究室と聞けば、イコール「釣り好き」と連想するほど、釣り人が集まっている研究室です。今号を編集していて、その楽しさが伝わってくるようでした。お手伝いした学生さん、おつかれさまでした。

来年度に企画している「高浜運河の四季を釣る」は、季節の移ろいにそって、その折々の旬の魚を釣る、という、これまた楽しそうな企画です。

本実習には、平成20年度財団法人日本生命財団学際的総合研究助成を活用しました。(川辺)

発行 江戸前ESD瓦版編集委員会
〒108-8477 東京都港区港南4-5-7
東京海洋大学江戸前ESD協議会事務局内
電話/FAX 03-5463-0574 (川辺研究室)
電子メール kawabe@kaiyodai.ac.jp